

# アートから考える 中川運河再生の可能性

竹中克行・金原彩音

# ① 価値観の転換

- ▣ 日常のモノ・コトに対する見方の切換え
- ▣ 違和感をプラスの価値に転じる「異化」
- ▣ アートが与える「場所のチカラ」

## 【文献】

岡田昌彰『テクノスケープ——同化と異化の景観論』鹿島出版会，2003年。

川端基夫『立地ウォーズ——企業・地域の成長戦略と「場所のチカラ」』新評論，2013年

## ② 交流空間の創出

- ▣ 人々の出会いに対する動機づけ
- ▣ 文化の関心共同体による地域再生
- ▣ 新産業が胚胎する町をつくるアート

### 【文献】

平田オリザ『新しい広場をつくる——市民芸術概論綱要』岩波書店，2013年。

野田邦弘『文化政策の展開——アーツ・マネジメントと創造都市』学芸出版社，2014年

# アートは・・・ 都市再生の処方箋たりえるか？

- ▣ 都市政策へのアートの位置づけは不安定
- ▣ 成功物語化した先行事例が与える錯覚
- ▣ 「普通」の町の事例に即した検討の必要性

## 研究の目的・方法

# 中川運河への注目

- 活動主体へのインタビュー調査
- アートイベントでの参与観察

### 【研究体制】

愛知県立大学 竹中研究室（地理学・現代都市論）

金原彩音「中川運河における芸術活動の特徴と役割」  
(2015 年度卒業論文)

中川運河・空間コード研究（代表：竹中克行）  
『空間コードから共創する中川運河——「らしさ」のある都市づくり』鹿島出版会，2016 年





# 中川運河再生計画とアート

## 2012年 中川運河再生計画

### ■ 4本柱の再生構想

①交流・創造 ②環境 ③産業 ④防災

### ■ 都心から港へ3つのゾーン

【にぎわいゾーン】「ささしまライブ24地区の開発と連携し、緑地・プロムナードの設置や、沿岸用地へのカフェ、レストラン等にぎわい施設の誘導、水上交通の運航などを展開して、運河の魅力と回遊性を高めるとともに、運河の歴史や文化・芸術を楽しむ市民活動の継続的な実施を通じ、都心地域に集まる人びとが訪れたいくなるような「港と文化を感じる都心のオアシス」の形成をめざします。」〔「中川運河再生計画」47頁〕

▶竹中克行編著『空間コードから共創する中川運河「らしさ」のある都市づくり』鹿島出版会、2016年、20頁による



# 中川運河再生計画とアート

## 中川運河助成 ARToC10

### ■ 「都心のオアシス」の布陣

名古屋都市センター「中川運河再生文化芸術活動助成事業」  
リンナイ(株)の寄付を原資とする 1000 万円× 10 年の助成

### ■ 4 つの視点による評価

視点 1—**にぎわいの創出**につながる内容か

視点 2—中川運河の**場の特性**を活かした内容か

視点 3—文化的価値があり，芸術性が高い活動か

視点 4—事業スケジュール，予算は具体的かつ妥当か

(留意点) 名古屋**市内在住者**を含む団体  
実施場所は**応募者が事業者と交渉**

## ARToC10 による助成団体

### 2013 年度

中川運河チャンネルアート	チャンネル・マルクト・フェスタ
--------------	-----------------

シネマスコーレ	Moosic in 中川運河
---------	----------------

伏木啓	中川運河映像アーカイヴプロジェクト
-----	-------------------

### 2014 年度

伏木啓 + 木田歩	中川運河映像アーカイヴプロジェクト
-----------	-------------------

中川運河チャンネルアート	Nature/Landscape/Human
--------------	------------------------

N-mark	中川運河リミコライン・アートプロジェクト
--------	----------------------

### 2015 年度

シネマスコーレ	Filmusic in 中川運河・夏
---------	--------------------

伏木啓 + 木田歩	中川運河映像アーカイヴプロジェクト
-----------	-------------------

N-mark	水辺に生息するアート limicoline Art Project
--------	--------------------------------------

▲名古屋都市センターの資料による

# インタビュー協力者

## ① 清水裕二氏

——中川運河チャンネルアート

- \* 建築家，大学教授
- \* チャンネルアート実行委員長
- \* 倉庫空間の可能性への関心



▲中川運河チャンネルアート Project No.2, 「時を超えて語り継がれる音楽と舞踏の光と影」(中木健二+山田茂樹) [2012年10月清水裕二撮影]

## ② 武藤勇氏

——N-mark

- \* 作家，アートディレクター
- \* 町に溶け込むアート活動の追求
- \* アートポート以来の港へのアプローチ



▲ Limicoline Art Project, 長七たたきの技術と造形を空間づくりにいかした「中川茶屋」[2014年11月横関浩撮影]



## インタビュー協力者

### ③ 伏木啓／木田歩氏

——中川運河映像アーカイヴプロジェクト

- \* 映像メディア作品の制作，人材育成
- \* 中川運河の風景と人々のアーカイヴ
- \* インスタレーション作品として表現



▲長良橋から都心を背景にとらえた「waltz 2015」の様子〔2015年11月竹中克行撮影〕

### ④ 木全純治氏

——シネマスコーレ

- \* 映画館の代表取締役
- \* 愛好家向けのミニシアター
- \* 中川運河に絡む短編映画を制作



▲中川運河で「起こりそうなこと」を物語化した「Filmusic in 中川運河・夏」の撮影風景〔「中川運河助成 ARTtoC10」Facebookの掲載写真〕

## インタビュー協力者

### ⑤ 浅井信好氏

—— 舞踏家

- \* 中川運河近隣出身のダンサー
- \* パリを拠点にダンスカンパニー創設
- \* キャナルアートで2回公演



▲キャナルアート Project No.4 の目玉として披露され、パリで初演となった作品「あわい (Betweenness-Encounter)」[2014年11月大洞博靖撮影]

### ⑥ 小澤勝志氏

—— リンナイ株式会社

- \* リンナイの広報室に勤務
- \* 企業の立場から中川運河再生を支援



▲リンナイ旧部品センターで開催された ARToC10 の PR イベントの様子 [2015年8月竹中克行撮影]

## インタビュー結果の比較分析

# アートは価値観の転換を促したか？

### ■ 中川運河をモチーフとして作品づくり

運河空間の経験が制作のモチーフとなり，作品の鑑賞を通じて人々と運河が繋がる

「水の上は土台が物理的に揺らぐ新しい環境。圧倒的な身体性を感じる」（伏木）

「運河の魅力や新たな発見，そして運河に関わる人々の思いを目に見えるカタチにする」（武藤）

### ■ 舞台装置として中川運河の可能性を追求

市街地の中に唐突に挿入された港湾空間が醸し出す時空間的なギャップを意識化

「音楽，舞踏，映像など，さまざまな角度から中川運河にアプローチし，その舞台性の発見を試みてきた」（清水）

「（アートは）中川運河を知ってもらうための広告のようなもの」（浅井）

## インタビュー結果の比較分析

# アートは価値観の転換を促したか？

### ⇒関わりを動機づける

(運河をコミュニケーションする作品)

「理想は、その辺にいる人たちが日常の中でいつもと違うものに出会うこと。地域にアクセントを与えたい」(伏木)

「アートは、そこにある美しいものや難しい問題をビジュアル化し、後世に残す働きができるメディア」(武藤)

### ⇒外の視線を引き寄せる

(舞台装置の可能性を追求する作品)

「アーティストが気づき、それを広める」(清水)

「まずは浅いもので人に来てもらい、お客さんを育てた後、深い作品を作る」(浅井)



## インタビュー結果の比較分析

# アートは交流空間を創出したか？

### ■アートの周りにコミュニケーションを生む

集客を目的化したにぎわい施設ではなく、中川運河と関わるための動機づけをデザイン

「商業施設は飽きられたら集客力を失うが、文化があれば人は来る」(清水)

「ファミレスのにぎわいではなく、何のために人が来るかのかが大切」(木全)

### ■地域社会のエンパワーメントを促す

外部主体が参加する発見・共有プロセスを通じて、地域社会の文化へのアクセスを向上

「中川運河は工場などが多く、まちづくりとか、そういう感じがしない場所…  
どういう住民をつくっていくべきか…  
普遍的な問いと向き合う場所」(武藤)

「中川運河でしかできない大人の遊びから、アートが生まれてゆく」(武藤)

## インタビュー結果の比較分析

# アートは交流空間を創出したか？

### ⇒作品づくりへの参加による交流空間づくり

「自分より若い世代の人と一緒に作りあげるなかで、この人たちの思いをかたちにしてあげたい」(浅井)

「運河を重視しているから、中川区の人たちにもエキストラとして参加してもらっている」(木全)

### ⇒アートの積極的な立ち位置の模索

「世界の人に中川運河は芸術をやっている場所だと認識されてほしい」(小澤)

「繰返し行いうちに、鑑賞者が変わって、高齢者も増えた。ただ・・・一過性のイベントして消費されてしまうのは、アートとして本意でない」(伏木)

# アート活動を取り巻く課題は何か？

## ■ 中川運河沿いのアート活動に対する制約

「常に活動できる場所がない・・・場所も自分で探さなくてはならない」

「ふだん運河で活動していても助成金はもらえない」

\*\*\*

倉庫敷地に関する固有の制度的条件は、制約であると同時に、官民連携の都市づくりを追求する道具立てになりうる。

## ■ 応募時点から限定的な参加状況

「今の助成金のシステムではグループを増やすのは難しい」

「助成額は世界的にみても大きいから、海外の作家も参加したがるかも」

\*\*\*

助成制度の柔軟な運用により、作品のモチーフ・舞台装置として中川運河に新しい光を当てるアイデアを広く問うべき。

# アート活動を取り巻く課題は何か？

## ■何のためのアート活動に対する助成か

「アートとして考える部分と、プロジェクトとして都市センターと関わる部分の切分けができていて、問題はあまり感じない」

「現状では、すべての企画に人を呼ぶ力があまりない・・・何のためのアートかをきちんと考える必要がある」

\*\*\*

作品制作に邁進するアーティストへの支援から一歩進んで、運河再生という目標に踏み出そうと企図するならば、都市の空間整備や新産業の育成へ至るプロセスを推進する都市政策の中に、アートが果たすべき役割を定置する必要がある。



# 「中川運河アート」の出現

## ■ ARToC10 のこれまでの の主要な成果

作品のモチーフ・舞台装置として中川運河らしさを追求するアートが生まれた

既成の認識枠組みのなかで見落とされがちな価値への気づきを与えるアートの役割が可視化された

表現者と鑑賞者の繋がりや作品を囲む鑑賞者相互の交流への動機づけが生まれた

## ■ 中川運河の空間文脈に 対する価値づけ

アート活動がめざしているのは、一般流通するブランドや商業モデルを持ち込み、意図的ににぎわいをつくり出すことではない

むしろ、商業施設の乱立によって、創造力を掻き立てる運河の独特の雰囲気損なわれることへの警戒心が強い

# 中川運河らしい利用価値の発見

## ■ 「細長い港」にふさわしい活動の探求

名駅から外港に至る同心円的な空間構造の両端を繋ぐ中川運河は、新しい都市の文化・経済創出を牽引する軸になりうる

工学系コンテンツ産業，若い世代が担うカウンターカルチャー・・・（2016年3月「チャンネルアートミーティング」より）

## ■ 都市政策のグランドデザインへの位置づけ

アート活動は、中川運河らしさを発見し、追求するに値するにぎわいの方向性を教えてくれる

中川運河の利用価値を明確化する広義の計画論を打ち出し、その中でアートにこそ担いうる役割を見定めることが必要

## 考察・結論——アートがいきるために

# 「ものづくり都市」 × 「デザイン都市」

### ■ 戦略的分野を繋ぐ空間政策の必要性

横浜で BankART が成功したとすれば、文化・芸術を柱とする創造都市・横浜の都市政策の中で、創造界隈形成の起点として明確な位置づけを与えられたから

ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟している名古屋では、活発な国際交流イベントの傍らで、市の産業振興事業との連携が弱く、デザインの発信源となる地区が形成されていない

新産業育成、文化へのアクセス向上、国際発信力強化を束ねて大きな力とするには、ものづくり都市とデザイン都市という性格が重なる名古屋大都市圏の空間政策へそれらを接合することが必要

